

今朝はいやに白髪が目立つ。前に美容院へ行って一ヶ月になるのだ。久しぶりに伸ばしたくて少し長めになった髪を、思い切って、今流行りの襟足の長い左右のバランスカットにしようと思っかけた。

「どうですか。随分感じが変わりましたよ。お若くなりました」

美容師のリップサービスと分かっているお世辞にも、気分は軽くなってきた。

美容院を出たのはお昼前だった。もう一度家に帰るのも、病院に行くにも時間的には中途半端になってしまった。昨日から揺らいでいた気持ちが髪を切ったからだろうか、少し軽くなったよう

に感じる。

近所の見舞い客は、一時は過ぎるだろう。夫と二人だけの長い時間は、今の美沙には苦痛でしかない。

髪を切った美沙は、急に思いついたように、〈愛慕里〉へと車を走らせた。一人で喫茶店へ出かける習慣など美沙にはなかった。自分でもどうしてなのかわからない。

喫茶店へ行こうと、スナックへ行こうと別に悪いことでもないじゃない。大人でしょう。何でそのくらいのことができないの」

美沙の煮え切らない性格を見かねた友人の律子の苦言だ。きついその口調とは反対に、顔だ

けは華がほころぶように笑って言う。時々律子の方が年下だということを忘れてしまう。そして、律子は声がいい。人は言葉で喜ばせたり傷つけるのではなく、その声音がなせる技だと、納得させられる。

「いつも誰かと一緒にいるわけにはいかないでしょうに」

こんな風に何事にもテキパキとことがはこべる律子には到底かなわない、と美沙はいつも感心していた。

しかし今日の美沙はどこか違っている。少し気恥ずかしかったが思い切って〈愛慕里〉のドアを開けた。

客はまばらだった。正午までには少し間があるからだろうか。とりあえず、美沙は手前のボックス席に座った。

「いらしゃいませ」

髪を一つに束ねた、いかにも清潔そうな中年の女性がおしぼりと水を持って美沙の前に立ち、声をかけてきた。

美沙も軽く頭を下げ、笑顔を向ける。

「お食事ですか」

「ええ」

「メニューはこちらです。決まりましたら、お知らせください」

「土曜日でも、タイム・ランチはあるんですか」

「はい、今日は生姜焼きと菜の花のおひたし、ポテトフライですが」

「じゃそれでお願ひします」

「はい、承知しました。お飲み物は」

「ホット珈琲で」

「はい。少々お待ちください」

色白の顔に、濃いめの口紅がよく似合っている。

美沙はゆつくりと店内を見渡した。カウンター

五、六席、窓際にボックス四席のそれほど広くな

い店の中は、茶色いしっとりした色合いの壁で、

落ち着いた雰囲気だった。

カウンターの隅にクリスタルガラスの花瓶に、や

わらかい桃色のスイートピーがいっぱい入って

いるのが、妙にこの店の落ち着きに似合っていた。確かに五月の花だ。

五、六人いる客もこの店にすっかり馴染んで、

自分の定席に座っているように感じ取れた。

美沙は離れたボックス席に目を見張った。

美沙に背を向けて座っている女性がいた。

間違いなく昨日のバスの老女だ。

(あの人がいる！)

美沙の胸は急にどきまぎしたように、さわぎ

だした。

この喫茶店へ寄ったのは、もしかしたら、とい

うこんな偶然をどこかで期待していたのかもし

れない。

老女は美沙の気配など全くおかまいなしに、

ゆつたりとした時を楽しんでいるように思えた。

「お待ちどうさまです」

注文のランチが運ばれてきた。大皿の中に、

菜の花の緑色が色鮮やかに陣取っている。一口

ずつ味わうように箸をすすめる。軟らかい優しい

味付けで美沙の箸は進んだ。そして、余すことな

く食べることができた。

「どうぞ」

気配りができているのだろう。タイミングよく

珈琲が運ばれてきた。

美沙はゆつくりと香りを味わうようにカップ

を手にして、一口すすする。

ふりはらつてもまとわりついている名刺入れにあ

った夫と妹の写真のことなど、すっかり忘れ

てしまったような、満たされた気分になっていた。

美沙は腕時計に目をやった。十二時二十分だ。

夫の病室へ行くまでにはまだ少し時間がある。

しばらくここで過ごそうと前の方に座っている

老女の背中を見つめていた。

(どんな暮らしをしてきた人なのだろう)

日頃は人の生活を詮索したりしない美沙が、こ

の老女には興味を持ってきていた。

土曜日の昼の明るさに合わせたかのように、店

の中のBGMは、「恋の歌」が流れている。

タンゴのリズムだ。ダンス音楽を選択しているの

だろうか。

と、その時、ドアが開いて背筋の伸びた背の高  
い初老の男性が入ってきた。頭髪は歳相応に白  
に近いグレーだった。

男性は店の中を見渡し老女を見つけると、さつ  
さとその傍らまで歩み寄り、美沙にも聞こえる  
くらいの声で話しかけた。

「先生こんにちは。今日は土曜日だから、ここに  
は寄ってないと思っていたのに、でも逢えてよか  
った」

「良夫さん、いつも言っているでしょう。先生は  
もうやめにしてね。名前がいいのよ。きょうはお  
天氣がよかったので出てきたのよ。もうこの歳だ

のいいグレーのカーディガンを着こなしている。

傍目には老人同士と呼んでしまつては失礼な  
くらいの洒落たカップルのように映る。

(先生って一体どういうことだろう)

男性は確かにそう呼んでいた。

「お砂糖は一つよね」

女性としてのたしなみだろうか。先生と呼ばれ  
た老女が、さりげなく男性に氣遣っているようだ。

「ありがとうございます」

美沙の眼には、氣のおけない二人の親密な時間  
が流れているように見えた。

病院へ行く時間が迫ってきていた。美沙が席  
を浮かした。すると、前の老女もまるで打ち合わ

から来られるときは思い切つて出て来ないと、ね」

「会えると思つてなかったけど、よかった」

男はよほど嬉しかったのだろう。「よかった」  
の聲が美沙にさえ弾んで聞える。

「まあまあこちらにお掛なさいな」  
老女もにこやかに、立っている男を促してい  
る。

「じゃ」

男は腰を降ろし珈琲を注文した。

美沙の席から二人の会話は耳に届く。腰をおろ  
した男性の姿はよく見えたが、なるべく視線が  
合わないよう、窓の外へ目をそらしていた。

老女よりひと回りくらい若そうなその男性は、品

せたように、立った。

「あら、まあ」

振り向いた老女が美沙に笑顔を向けた。

「こんにちは」

あわてた美沙は突拍子もない声を出した。

「まあ、たしか昨日バスの中でお会いした人です

よね」

「ええ。その節はどうも。中野です。中野美沙で  
す」

美沙はどきまぎしながら、こつくりと頭を下げ、  
名前まで告げてしまった。

二人のやりとりに穏やかな目を注いでいる向か  
いの男性にも会釈をした。

老女が美沙の席に近寄り、親し気な口調で話しかけてきた。

「よかつたらこちらで一緒にしませんか」

同席の男性へ同意をもとめるように、眼差しを

合わせる。

美沙はなぜか気恥ずかしいくらい嬉しくなった。

が、心のうちでは気が急いでいる。

「すみません。今日はこれで失礼します。病院へ行く時間ですので」

「まあ、残念だわ。でも楽しみは今度までとっておきましょうかね。ところで失礼ですがどこかお悪いの」

老女が心配そうな口調だった。美沙は恐縮

したように言った。

「主人がちよつと怪我で入院しているもので。

せつかくのお誘いすみません」

そして、消え入るような声で頭をさげた。まだ

緊張が解けていない。

「そう、お怪我の入院だったら必ず治りますわ

ね。また逢いましょう」

老女の笑顔が嬉しかった。今さらながら病院

へいくことがうれしい。

「ありがとうございます。八百五十円です」

老女と椅子に掛けている男性に頭を下げ、レ

ジの前に立った美沙は言われるまま財布からお

金をだし、店を出ようとした。

(以上5月7日放送分)